

- 地方幹線道路拡幅事業における住民参加に関する研究, 土計論22, pp.361-370
- 77) 榊原弘之・高橋啓介・坂元鉄兵:道路ネットワークの分権的運営モデル, 土計論22, pp.19-30
- 78) 若林拓史・大野隆晴・鈴木宏章:道路ネットワークの重要度評価: 確率重要度とクリティカリティ重要度による信頼性向上効果, 土計論22, pp.751-760
- 79) 伊藤宏匡:鉄道網を基軸とした岐阜市の都市形成に関する研究, 土計論22, pp.353-360
- 80) 長田哲平・森本章倫・古池弘隆:Web-GISを活用した大規模小売店舗立地時の交通アセスメント手法の提案, 交工論25, pp.97-100
- 81) 阿部宏史・新家誠憲・永禮拓也:運輸部門を細分化した地域産業連関表に基づく二酸化炭素排出動向の分析, 土計論22, pp.271-278
- 82) 竹内雄亮・新田保次・松村暢彦・吉田雄亮・藤江徹:車載機器を用いたエコドライブ支援の効果, 土計論22, pp.305-314
- 83) 相浦宜徳・谷口栄一:貨物車両の駐停車行動を考慮した路上荷捌き施設配置計画モデルに関する研究, 土計論22, pp.633-642
- 84) 相浦宜徳・谷口栄一:荷さばき用施設における予約システム利用率と便益に関する研究, 交工論25, pp.113-116
- 85) 田中康仁・小谷通泰・中村賢一郎:プローブデータを活用した貨物車による配送活動の実態分析, 土計論22, pp.715-722
- 86) 紀伊雅教・淡清之・廣田恵子:トラック輸送効率化によるCO₂削減効果のマクロ的分析, 土計論22, pp.761-766
- 87) 塚原真理子・藤田素弘・山岡俊一:ヘッドニックアプローチを用いたコミュニティ道路整備の便益評価, 交工論25, pp.209-212
- 88) 鈴木義康・児玉健:交通バリアフリー評価への社会経済的評価手法の適用に関する基礎的研究, 交工論25, pp.157-160
- 89) 諸田恵士・塚田幸広・河野辰男:一般化時間による交通結節点の評価手法に関する研究, 交工論25, pp.145-148
- 90) 渡邊健司・千葉尚・藤井聡・森田紳之:行動意図データを用いた非集計出発時刻選択モデルの構築, 交工論25, pp.117-120
- 91) 井料隆雅・吉井稔雄・朝倉康夫:出発時刻選択問題の均衡状態に関する数理的分析, 土論IV-66, pp.105-118
- 92) 和泉範之・奥嶋政嗣・秋山孝正:空間情報を利用した交通行動の時間的推移の表現方法, 土計論22, pp.405-412
- 93) 牛若健吾・菊池輝・北村隆一:所要時間の認知に基づくセーフティーマジンの要因分析, 土計論22, pp.569-574
- 94) 福田大輔・渡部数樹・ネバルカリプレサッド・屋井鉄雄:平日の時間利用評価が休日の時間配分及び活動時間価値形成に及ぼす影響, 土計論22, pp.421-430
- 95) 喜多秀行・月岡修一:乗降者データに基づく路線バスの利用者ODパターン推計とその評価, 土計論22, pp.145-152
- 96) 稲垣具志・内田敬・日野泰雄・吉田長裕:原動機付自転車の走行挙動を表現するポテンシャルモデルの概念構築, 土計論22, pp.831-838
- 97) 松中亮治・谷口守・楠田裕子:福祉有償運送サービス導入後の移動制約者の交通行動に影響を与える要因の分析, 土計論22, pp.815-822
- 98) 張峻屹・藤原章正・杉恵頼寧・山田敏久:世帯内相互作用の異質性を考慮した時間配分モデルの高齢者交通政策への適用可能性, 土論IV-67, pp.53-66
- 99) 森山昌幸, 藤原章正, 張峻屹, 杉恵頼寧:中山間地域における高齢者対応型公共交通サービスの需要予測モデルの提案, 土論IV-67, pp.39-52
- 100) 李燕:全道路網における交通量配分:GISをプラットフォームとする交通計画へ向けて, 土計論22, pp.430-438
- 101) 内田賢悦・加賀屋誠一:プロビット型確率的利用者均衡を適用したマルチモーダル配分による公共交通評価手法に関する研究, 土計論22, pp.439-450
- 102) 岡田良之・三輪富生・森川高行:確率的利用者均衡配分モデルにおける分散パラメータに関する研究, 土計論22, pp.523-530
- 103) 嶋田喜昭・井戸章博・橋本成仁:「抜け道」利用の実態とドライバーの意識との関連性, 交工論25, pp.125-128
- 104) 黒川卓司・松本幸正・松井寛・堀場庸介:プローブデータを用いた均衡状態における経路交通量の推定, 交工論25, pp.241-244
- 105) 三輪富生・森川高行・倉内慎也:プローブカーデータを用いた動的な経路選択行動に関する基礎的分析, 土計論22, pp.477-486
- 106) 堀場康介・松本幸正・松井寛・高橋政稔:プローブデータに基づく推定経路交通量への観測誤差の影響分析と推定経路交通量の更新手法, 土計論22, pp.495-506
- 107) 斎藤健治・清田勝:プローブ自転車による自転車歩行者道のバリア調査法, 土計論22, pp.177-182
- 108) 須永貴之・轟朝幸・谷口滋一:端末交通における経路情報提示型Webアンケート手法導入の可能性に関する研究, 交工論25, pp.185-188
- 109) 鷹尾和享・朝倉康夫:自由回答文からの交通経路のアспекトの取捨選択方略の抽出, 土計論22, pp.11-18
- 110) 松永千晶・栄棋・吉永誠・寺町賢一・角知憲:中心市街地における歩行者の経路選択モデル, 土論IV-67, pp.67-76
- 111) 塚口博司・竹上直也・松田浩一郎:不整形街路網地区における歩行者の経路選択行動に関する研究, 土論IV-66, pp.45-52
- 112) 岸昭洋・河野遠仁・森杉壽芳:一般化交通費用に基づく交通需要予測のバイアスと内生的時間価値, 土計論22, pp.47-52
- 113) 福本潤也:需要予測におけるマニピュレーション抑止制度の比較分析, 土計論22, pp.133-144

緑地・環境 Green Area, Environment

佐々木邦博

Kunihiro SASAKI

信州大学 農学部森林科学科

1. はじめに

緑地やその環境は、都市生活のアメニティを捉えていく上で、検討を欠かすことができない重要な要素であるとともに、生態系や生物の生息の面から見ても重要な要素である。市民が生活していく上で、リラックスできる場を構成していたり、公園が災害時の避難場所になったり、街路樹が都市景観を

整えていたり、またさまざまな動植物が見られる場所であるなど、多様な機能をもっている。

従来からこれらの点は重要視されており、都市の緑地の整備が図られ、民有地の緑化も進められてきた。最近の傾向は都市の緑による都市部の生態系を重視すること、そして緑の維持への住民参加が進んでいることなどである。街路樹や庭木から森まで、市民が自ら緑の多様な役割を考え、自らの手で保全していくことにつながっていくだろう。

本稿では、過去3年以内に、都市計画学会、造園学会、環境情報科学センターの会誌に掲載された審査付き研究論文を中心に、レビューを行う。

ただし、限られた枚数ゆえに、都市生活のアメニティを図る研究を中心に取り上げていく。

2. 緑地に関する歴史研究

都市緑地に関する歴史的研究だが、明治時代以後に焦点を当てたものが多い。井原は江戸時代に形成された大名庭園が公園化されていくプロセスを追っている¹⁾²⁾。明治以降における社寺境内地の緑の変容も、清水らにより大阪を事例として研究が進められている³⁾。

近代に成立した公園などの緑地だが、杉田により計画標準と実際の計画図面との比較が研究されている⁴⁾。また、真田により戦前の東京保健道路計画の計画思想が考察され⁵⁾、東京緑地計画の計画作成が研究対象とされている⁶⁾⁷⁾⁸⁾。風致地区に関してだが、戦前期の風致地区制度が東京緑地計画への布石と原らにより考察されている⁹⁾。

海外を事例地とした研究では、特にグリーンベルトが取り上げられている。韓国のグリーンベルト制度については周藤らによりその歴史と評価が考察され¹⁰⁾、中国の北京に関しては劉らにより考察されている¹¹⁾。ロンドンのグリーンベルト計画を対象として、アマティ、マルコらにより計画の策定、実施時の関係するグループの動向が既存研究よりも細かく研究され¹²⁾¹³⁾、スクエアに関しては坂井により歴史から再生まで取り上げられている¹⁴⁾¹⁵⁾¹⁶⁾。

史跡名勝天然記念物に関しては、名勝と公園事業をめぐる論議が赤坂により考察され¹⁷⁾、また「社叢」の意味と位置づけの変遷が藤田らにより考察されている¹⁸⁾。

最後に、現代史といえるが、楊らにより公園政策の展開に関する日台比較が研究されている¹⁹⁾。

3. 公園

公園の利用を対象とした研究では、調査方法としてハン

ディGPSを用いる方法が篠崎らにより検討され²⁰⁾、山本らにより利用者の行動パターンが調査研究されている²¹⁾。また、車いす使用者の公園利用実態とGISを利用した園路勾配などの評価は愛甲らにより調査研究され²²⁾、大規模丘陵地型公園の利便性についてもGISを利用した地形解析により調査研究されている²³⁾。前橋市の総合公園を対象として、塚田らは利用者の満足度における評価構造や利用の課題を考察している²⁴⁾²⁵⁾。プレーパークに関しては、その活動と都市公園の活性化に及ぼす影響を宮崎らが調査し、考察している²⁶⁾。防災面に関しては、樋口らが中越大震災時の住民の避難状況と公園利用を明らかにしている²⁷⁾。海外を事例とした研究は、戴らにより中国の公園における太極拳とその空間特性が研究されている²⁸⁾。

公園の運営に関しては、藤本らにより住民参加型の公園運営について考察が進められている²⁹⁾。また、広場のケースだが、佐藤らにより検討されている³⁰⁾。

さて、公園内にある植物などの要素だが、内田らにより植栽樹木の推移が調査され³¹⁾、花修景と利用促進に関して平松らが調査している³²⁾。野外彫刻は、阪神淡路大震災後の変容に関して、石崎らが調査を行っている³³⁾。

公園の環境管理に関しては、GISを利用した生態系の環境評価が小栗らにより進められ³⁴⁾、また有機廃棄物に対する還元可能性について堀江らにより調査されている³⁵⁾。

公園内の景観に関しては、伊藤により好まれる景観と印象に残るものの関係が調査研究されている³⁶⁾。また、また、サウンドスケープだが、葛らにより調査されている³⁷⁾。

公園周辺の住民に対してだが、公園緑地の俯瞰景の評価については五十嵐らにより調査がなされ³⁸⁾、藤居により長野市の街区公園を対象に住民意識が分析されている³⁹⁾。

一方で、不安感に関する研究も行われている。雨宮らにより小公園での犯罪リスクの認知について研究が行われ⁴⁰⁾、街区公園の不安感発生要因が中西らにより⁴¹⁾、緑道空間の不安感が木村らにより研究されている⁴²⁾。

4. 道路や住宅地の緑とまちづくり

街路の緑だが、樹木保全を考慮した道路事業計画について河名らが⁴³⁾、樹木の管理責任について細野らが⁴⁴⁾、市民による街路樹の植え柵利用について松井らが⁴⁵⁾、街路樹とまちづくりについて高尾らが⁴⁶⁾、狭隘な街路の緑化の実態については大澤が⁴⁷⁾、研究を進めている。

街路空間における植物栽培の実態については大藪らが⁴⁸⁾、月島の路地の植物については高橋らが⁴⁹⁾、宅地内の庭木や

生け垣による緑の景観については林らが⁵⁰⁾、調査研究を進めている。

まちづくりに関してだが、自然環境評価とまちづくりへの参加の相互関係について北中らが⁵¹⁾、地域らしさと緑に関して石田らが⁵²⁾、緑豊かなまちづくりへのワークショップに関して林らが研究を進め⁵³⁾、好感される「自然らしさ」と手入れについて水上らが⁵⁴⁾、小学校でのまちづくり学習について篠部らが⁵⁵⁾、研究を進めている。

団地の建替と既存樹木の利用について小木曾⁵⁶⁾⁵⁷⁾と加我らが⁵⁸⁾、戸建住宅地の緑被の変化については山田らが⁵⁹⁾研究を進展させている。

まちの緑化活動の指導者養成であるアメリカのマスターガーデナーおよびコミュニティガーデンの実態について平田らが⁶⁰⁾⁶¹⁾、日本のオープンガーデンについて野中⁶²⁾⁶³⁾が、その行政支援については平田⁶⁴⁾が研究を深めている。

植物に関してだが、風土になじんだ植物の利用調査は林により⁶⁵⁾、単独にある樹木への認識については田原らが⁶⁶⁾調査している。

5. 学校の緑と子どものあそび

学校の敷地の対象とした研究が増えている。幼稚園の園庭の実態を張らが⁶⁷⁾⁶⁸⁾、小学校と隣接した公園の利用実態を安藤らが⁶⁹⁾研究している。校庭の巨樹を用いた環境学習について長友らが⁷⁰⁾、校庭の芝生化について田邊ら⁷¹⁾と藤崎が⁷²⁾調査を進めている。

子どもの遊びと遊び場だが、昭和30年代における環境条件について寺内らが⁷³⁾、水辺遊びの変容について佐竹らが⁷⁴⁾、冬季の戸外遊びについて曾らが⁷⁵⁾、遊びからみた校庭改善を仙田が⁷⁶⁾研究している。

6. さまざまな緑地と環境

緑地分布に関する広域的な分析手法について熊谷らが⁷⁷⁾、緑地分布の長期の変化については桑原が⁷⁸⁾⁷⁹⁾、小流域を単位とした緑地環境について山下が⁸⁰⁾⁸¹⁾、ランドスケープの変化と樹林地の偏在性について藤田らが⁸²⁾研究を進めている。都市域スケールでのピオトープ地図作成に関して大澤が⁸³⁾、ミチゲーションを導入した緑被保全について宍倉らが⁸⁴⁾⁸⁵⁾、その道路整備事業への適用に関して伊東らが⁸⁶⁾調査研究している。

河川緑地のネットワークインフラとしての機能は栗原らが⁸⁷⁾、河口部のクロマツの景観特性について菊田らが⁸⁸⁾、緩衝緑地整備の事業効果については鈴木らが⁸⁹⁾⁹⁰⁾、神社と自然

環境との関わりについては是澤らが⁹¹⁾調査している。

また、屋上緑化の推進策の研究が平山ら⁹²⁾と小木曾ら⁹³⁾により、住宅の立面緑化について岡田ら⁹⁴⁾により、病院の緑化の実態について木本らに⁹⁵⁾より進められている。

市民による緑地保全活動について、中島らによる参加意欲の研究があり⁹⁶⁾⁹⁷⁾、田中らによる保全活動のプロセスについての事例研究がある⁹⁸⁾。

最後に水の環境に関する研究をまとめると、親水公園整備の実態が養田らにより⁹⁹⁾、城下町の水路網について佐々木らにより¹⁰⁰⁾、水辺環境の評価について和田らにより¹⁰¹⁾、また地域住民の親水行動について金らにより¹⁰²⁾、住民による水辺の管理運営活動について駒田により¹⁰³⁾研究が進められている。

7. おわりに

最近の研究に見られる傾向は、いくつかある。過去の緑の状態、歴史的経過、あるいは計画の再検討や検証が行われている。また調査の新たな手法が試みられるとともに、公園に対する不安感などのマイナス面が対象にされている。そして、緑地の保全や緑のまちづくりへの住民参加が調査研究の対象になっている。

これらの調査研究活動は、現在まで行われてきた緑地政策を再度吟味し、緑地の保全整備を推進するための基盤を再構成していこうと、市民が主体になる緑地の保全活動や運営に向けて、後押ししていこう。それが都市の一部で始まり、部分的に進んでいくとしても、都市全体を包含する大きな動きに成長することを期待している。

【参考文献】

- 1) 井原縁:玉藻公園における文化遺産の公園化とその変容に関する史的研究,ラン研67(5),387-392
- 2) 井原縁:栗林公園にみる文化遺産の公園化とその変容に関する史的研究,ラン研68(5),389-394
- 3) 清水美砂・田原直樹・谷勝紀昭・上甫木昭春:名所図会に描かれた大阪の社寺境内地における歴史的緑の変容プロセスに関する研究,環境情報科学論文集18,171-176
- 4) 杉田早苗:近代東京の公園計画にみる計画図面と計画標準の関係の変遷,都論,40(1),1-8
- 5) 真田純子:東京保健道路計画の計画思想に関する研究,ラン研67(5),423-428
- 6) 真田純子:東京緑地計画における環状緑地帯の計画作成過程とその位置づけに関する研究,都論38(3),601-606
- 7) 真田純子:東京緑地計画景園地の計画意図に関する研究 - 計画作成過程と立地に着目して -, 都論39(3),901-906
- 8) 真田純子:東京緑地計画作成の理論的背景としての公園および緑地の意味付けに関する研究,都論,40(3),247-252

- 9) 原泰之・小野良平・伊藤弘, 下村彰男: 戦前期における風致地区制度の位置づけに関する歴史的考察, ラン研69(5), 813-816
- 10) 周藤利一・越澤明: 韓国のグリーンベルト制度の歴史及び効果に関する研究, 都論39(2), 95-104
- 11) 劉暢・赤崎弘平: 北京緑化隔離帯の計画とその実現についてーロンドン, 東京との比較による北京緑化隔離帯計画に関する研究ー, 都論, 40(3), 793-798
- 12) アマティ マルコ・横張真: ロンドングリーンベルト計画の策定に関わるグループの役割, 都論38(3), 607-612
- 13) アマティ マルコ・横張真: 1930年代のロンドングリーンベルト設置時における土地所有者, 政府, プランナーの動向, ラン研67(5), 433-438
- 14) 坂井文: 都市中心部における小規模オープンスペースの確保に関する歴史的的研究ーロンドンスクエア保護法成立の背景ー, 都論38(3), 613-618
- 15) 坂井文: ロンドンの近代都市公園計画におけるスクエアの影響に関する歴史的的研究, ラン研67(5), 439-442
- 16) 坂井文: ロンドンのラッセルスクエア再生事業にみる都市公共オープンスペースの再生, ラン研69(5), 651-654
- 17) 赤坂信: 大正末期から昭和初期における名勝保護と公園事業をめぐる議論, 都論39(3), 199-204
- 18) 藤田直子・小野良平・熊谷洋一: 史蹟名勝天然記念物保存における「社叢」の意味と位置づけの変遷に関する研究, ラン研68(5), 417-420
- 19) 楊 涵・金子忠一・葦茂寿太郎: 施策公園の展開に関する日台比較, ラン研68(5), 813-818
- 20) 篠崎高志・下村彰男・伊藤弘: GPSを使用した公園の利用状況調査法, 環境情報科学論文集17, 95-100
- 21) 山本泰裕・伊藤弘・小野良平・下村彰男: GPSを用いた新宿御苑における利用者の行動パターンに関する研究, ラン研69(5), 601-604
- 22) 愛甲哲也・柴田まち子: 車いす使用者から見た都市公園利用意識と遠路の連続性の実態ー札幌市における大規模公園を事例としてー, 都論, 40(3), 853-858
- 23) 中橋英雄・百瀬浩・小栗ひとみ・田代順孝・藤原宣夫: 地形解析による大規模丘陵型公園地の利便性の複合的評価手法の提案, ラン研67(5), 669-672
- 24) 塚田伸也・湯沢昭: 大公園における利用者の評価構造に関する研究ー前橋市の総合公園を事例としてー, 都論39(3), 193-198
- 25) 塚田伸也・岩間佳之・湯沢昭: 前橋市の総合公園(前橋公園)を事例とした地方都市における市街地大公園の利便的課題, ラン研69(5), 597-600
- 26) 宮崎由美子・下村泰彦・加我宏之・増田昇: プレイパーク活動から捉えた都市公園の活性化に関する研究, ラン研69(5), 665-670
- 27) 樋口秀・澤田雅浩・中出文平・小野木祐二: 新潟県中越大地震の初動期におけるライフラインの復旧と住民の避難及び公園利用に関する研究, 都論, 40(3), 709-714
- 28) 戴菲・章俊華・田代順孝: 中国武漢の公園広場における太極拳の活動場所の空間特性に関する研究, ラン研69(5), 605-608
- 29) 藤本真里, 中瀬勲: 兵庫県立有馬富士公園における住民参画型公園運営の課題と展望, ラン研69(5), 757-762
- 30) 佐藤正吾・佐藤友一・吉田鐵也: 住民参加型小広場回収事業における13事例の比較による運営実態に関する考察, 都論38(3), 643-648
- 31) 内田均・久保田和美: 東京都内の公園における植栽樹木の推移について, ラン研67(5), 457-460
- 32) 平松玲治: 利用促進に効果のある国営公園の花修景に関する考察, ラン研67(5), 713-716
- 33) 石崎奈美・福井亘・斉藤庸平: 阪神淡路大震災を契機とした公園緑地における野外彫刻設置の変容に関する研究, ラン研69(5), 383-388
- 34) 小栗ひとみ・島瀬頼子・藤原宣夫・百瀬浩・井本郁子・大江栄三・宇津木栄津子: 大規模丘陵地公園における環境管理計画のための環境の総合評価, ラン研68(5), 643-646
- 35) 堀江典子・田畑貞寿・萩原清子: 都市内緑地における有機性廃棄物の還元可能性に関する考察, ラン研68(5), 541-544
- 36) 伊藤弘: 新宿御苑における好まれる景観と印象に残るものの関係, ラン研68(5), 463-466
- 37) 葛堅・外尾一則: 広域的都市公園におけるサウンドスケープの形態についてー佐賀県立森林公園をケーススタディとしてー, 都論, 40(2), 1-7
- 38) 五十嵐且治・木下剛・田代順孝: 超高層住宅居住者の意識から見た俯瞰景としての公園緑地の評価, ラン研68(5), 763-768
- 39) 藤居良夫: 地方都市における街区公園に対する住民意識, ラン研68(5), 833-836
- 40) 雨宮護・横張真: 住宅地に立地する小公園に対する地域住民の犯罪リスク認知の構造と要因, ラン研68(5), 947-950
- 41) 中西康裕・柄谷友香・青山吉隆・中川大: 利用者意識からみた街区公園の不安感発生要因と不安感喚起地点予測モデルの構築, 都論, 40(3), 619-624
- 42) 木村千晶・熊谷洋一: 緑道空間における植栽と犯罪不安感に関する研究, ラン研68(5), 825-828
- 43) 河名知子・中井檢裕・中西正彦: 東京都内における樹木保全を考慮した道路事業の計画策定過程に関する研究, 都論39(3), 139-144
- 44) 細野哲央・三島孔明・藤井英二郎: 道路空間における植栽との接触事故の裁判例にみる管理者の責任と植栽管理内容の関係, ラン研68(5), 489-494
- 45) 松井美菜子・平田富士男: 神戸市における市民の植え枿利用が街路樹の生育環境に与える影響とその認識に関する研究, ラン研69(5), 631-634
- 46) 高尾忠志・樋口明彦: 街路樹のまちづくりへの影響に関する考察, 都論, 40(3), 601-606
- 47) 大澤啓志: 別府市旧市街における狭隘な街路緑化の実態について, 環境情報科学論文集18, 161-164
- 48) 大藪崇司・下村孝・小松さち恵: 住民へのアンケートによる京都市内の街路空間における植物栽培の実態調査, ラン研67(5), 717-722
- 49) 高橋俊・伊藤弘・下村彰男: 中央区月島を事例とした密集市街地の路地における植物の配置パターンと空間特性, ラン研68(5), 879-882
- 50) 林尚貴・川合史朗・浦山益郎: 宅地内の庭木や生け垣によって形成される緑の景観の経済価値ー専有空間のもつ公共性に対する地域共同管理の可能性に関する研究ー, 都論, 40(3),

- 841-846
- 51) 北中大輔・岩崎義一：自然景観評価とまちづくり参加意向の相互関係に関する研究，都論39(2)，86-94
- 52) 石田紘之・斉藤庸平：復興まちづくり事業における地域らしさの確保と緑に関する研究，ラン研69(5)，803-806
- 53) 林まゆみ・長谷川利恵子：宝塚市山本地区を事例とした緑豊かなまちづくりに向けてのワークショップの成果とその検証，ラン研68(5)，871-874
- 54) 水上象吾・萩原清子：都市住宅地域の緑において好感される「自然らしさ」と手入れの関係に関する考察，ラン研68(5)，875-878
- 55) 篠部裕：地域社会と連携した小学校でのまちづくり学習に関する研究－公園計画を題材としたPBL方式のまちづくり学習の実践と評価－，都論，40(3)，499-504
- 56) 小木曾裕：建替団地における既存樹木活用に対する居住者意識，ラン研68(5)，769-772
- 57) 小木曾裕：建替団地における既存樹木の保全と活用に関する期・工区手法について，環境情報科学論文集19，101-106
- 58) 加我宏之・待井陽介・下村泰彦・増田昇：既存樹木が保存された建替団地における建替前後の団地空間に対する居住者の嗜好性の変容に関する研究，ラン研67(5)，697-702
- 59) 山田真紀子・加我宏之・下村泰彦・増田昇：戦後に開発された阪神間の戸建て住宅地における緑被の変化実態に関する研究，環境情報科学論文集19，1-6
- 60) 平田富士男：アメリカのマスターガーデナーとその育成プログラム受講者の意識と活動－ワシントン州キング郡のマスターガーデナープログラム参加者へのアンケート調査から－，都論，40(3)，799-804
- 61) 平田富士男・陳小奇：サンフランシスコ市のコミュニティガーデンの実態とガーデナーコーディネーターの役割，都論38(3)，751-756
- 62) 野中勝利：日常的公開のオープンガーデンにおける鑑賞者の行動特性－小布施オープンガーデンを事例として－，都論，40(3)，847-852
- 63) 野中勝利：緑のイベント時におけるオープンガーデンの位置づけ，ラン研69(5)，789-794
- 64) 平田富士男：オープンガーデン活動に対する行政支援のあり方に関する研究－兵庫県における活動実施者のニーズ分析から－，環境情報科学論文集18，89-94
- 65) 林まゆみ：風土に馴染んだ植物の利用に関する意識調査，環境情報科学論文集18，19-24
- 66) 田原直樹・吉田由里・上甫木昭春：保護樹木制度に着目した都市域での単独樹木に対する認識特性に関する研究－阪神地域(尼崎市および豊中市)を事例として－，環境情報科学論文集18，25-30
- 67) 張嬉卿・仙田満・大野隆造・仲綾子：園庭におけるあそび行動よりみた遊具・広場計画に関する研究，ラン研67(5)，429-432
- 68) 張嬉卿・仙田満・井上寿・仙田考：幼稚園屋外空間の実態と園庭整備の方向性に関する考察，ラン研68(5)，479-482
- 69) 安藤太地・奥俊信・森傑：札幌市における小学校と都市公園の隣接パターンと利用実態の関連性，都論，40(3)，211-216
- 70) 長友大幸・下村孝：校庭の巨樹を用いた環境教育受講経験が児童の意識に及ぼす影響，ラン研69(5)，829-832
- 71) 田邊祐介・三島孔明・藤井英二郎：校庭の芝生が児童の校庭の利用に及ぼす影響に関する研究，ラン研68(5)，943-946
- 72) 藤崎健一郎：校庭芝生化の近年の推移と支援者達の活動に関する研究，ラン研69(5)，401-406
- 73) 寺内雅晃・加我宏之・下村泰彦・増田昇：昭和30年代における子どもの野外遊びを支えていた環境条件に関する研究，ラン研69(5)，659-664
- 74) 佐竹俊之・上甫木昭春：世代別で捉えた子どもの水辺遊びの変容に関する研究－奈良県生駒郡平群町におけるケーススタディー，環境情報科学論文集18，107-112
- 75) 曾碩文・浅川昭一郎・遠藤寛：札幌市における冬期の戸外遊びと遊び場に関する意識の変化，ラン研67(5)，703-708
- 76) 仙田考：坂田小学校における休み時間の遊び行動分布図からみる校庭改善の効果に関する研究，ラン研68(5)，837-842
- 77) 熊谷樹一郎・石澤秀和・川勝雄介：緑地の分布に関する広域的な分析方法の開発，環境情報科学論文集17，35-40
- 78) 桑原祐史・木村誉・小柳武和・志摩邦雄：面的緑地分布の長期時系列変化情報の作成－茨城県水戸市近傍を対象として－，環境情報科学論文集17，23-28
- 79) 桑原祐史・木村誉・小柳武和・岡本朗：衛生リモートセンシングデータを用いた面的緑地分布の長期時系列変化の推定－茨城県水戸市近傍を対象として－，環境情報科学論文集18，131-136
- 80) 山下英也・片桐由希子・石川幹子：小流域を単位とした緑地環境の分析に関する研究－鎌倉市神戸川を事例として－，都論39(3)，205-210
- 81) 山下英也・片桐由紀子・石川幹子：小流域を単位とした緑地保全地域の分析に関する研究－鎌倉市滑川流域を事例として－，都論，40(3)，865-870
- 82) 藤田直子・熊谷洋一：東京都心部のランドスケープ変化と樹林地の偏在性に関する研究，ラン研67(5)，577-580
- 83) 大澤啓志・山下英也・森さつき・石川幹子：鎌倉市を事例とした市域スケールでのピオトープ地図の作成，ラン研67(5)，581-586
- 84) 穴倉正俊・横内憲久・岡田智英：志木市の現行制度からみる新たな環境管理制度の方向性に関する研究－ミチゲーションを導入した志木市自然再生条例を中心として－，都論39(3)，247-252
- 85) 穴倉正俊・横内憲久・岡田智秀：埼玉県志木市における新たな緑被保全方策に関する研究－ミチゲーションを導入した条例の課題と解決策の検討－，都論，40(3)，859-864
- 86) 伊東英幸・福田敦：都市近郊における道路整備事業へのミチゲーションバンク適用の可能性に関する研究－首都圏中央連絡道路(幸手市区間)を事例として－，都論，40(3)，877-882
- 87) 栗原圭充・藤田壮：川越市における河川・公園緑地のネットワークインフラとしての機能評価，環境情報科学論文集18，101-106
- 88) 菊田翔一郎・上甫木昭春：地域資源としての河口部におけるクロマツの景観特性と住民意識に関する研究，環境情報科学論文集19，235-240
- 89) 鈴木広孝：緩衝緑地整備に果たした共同福利施設建設譲渡事業の意義と役割に関する研究，環境情報科学論文集18，343-348
- 90) 鈴木広孝・高橋寿夫：緩衝緑地整備の事業効果分析，環境情報科学論文集18，349-354

- 91) 是澤紀子・堀越哲美: 景観としての神社の立地に見る進行の場と自然環境の関わり, 都論39(3), 145-150
- 92) 平山豪・中山検裕・中西正彦: CVMによる東京都における屋上緑化推進施策の評価. 都論38(3), 595-600
- 93) 小木曾裕・橋本文恵・勝野武彦: 市街地建替住宅に伴う屋上緑化の居住者意識に関する研究, 環境情報科学論文集18, 13-18
- 94) 岡田準人・山崎美幸・下村孝: 京都市内の戸建て住宅で実施されている立面緑化の管理実態と住民の意識, ラン研68(5), 883-888
- 95) 木本久美子・柳井重人・丸田頼一: 東京都区部における病院の緑化実態について, 環境情報科学論文集17, 29-34
- 96) 中島敏博・古谷勝則: 学生意識に見る若者の緑地保全活動への参加意思誘発プロセス, 環境情報科学論文集19, 151-156
- 97) 中島敏博・田代順孝・古谷勝利: 住民意識と学生意識にみる緑地との関わり方の現状と緑地活動への参加意欲, ラン研69(5), 699-704
- 98) 田中聖美・柳井重人・田代順孝: 市民団体による樹林地保全活動とそのプロセス - 粕江弁財天池緑地保全地区市民の会の活動を事例として -, 環境情報科学論文集18, 43-48
- 99) 養田辰彦・畔柳昭雄: 東京都区部における親水公園整備の実態に関する調査研究, ラン研68(5), 451-456
- 100) 佐々木邦博・田井洋子・山村浩美: 長野市松代町東部に残る湧水と水路の現状と特徴, ラン研69(5), 369-372
- 101) 和田有朗・道奥康治: 利用者から見た水辺環境の評価, 環境情報科学論文集18, 95-100
- 102) 金那英・畔柳昭雄: 都市河川のオープンスペースに見られる地域住民の親水行動に関する研究, ラン研69(5), 747-750
- 103) 駒田健太郎・渡辺達三: 今井川いこいの水辺における住民による管理運営活動がコミュニティ形成に及ぼした効果, ラン研69(5), 627-630

年に都市計画法, 中心市街地活性化法の改正が行われ, いわゆるまちづくり三法の見直しが進められている。大都市の都心部では都心回帰が進んでいるものの地方都市では, 依然として街なか居住を推進させる決定打が出せていない。その中で, 中園ら⁷⁾⁸⁾は, 地方都市中心市街地の空き家活用について, 改修を前提とした長期借家契約方式を提案すると共に, 島根県で行われている空き家活用助成制度に言及し, その有効性を検証している。土岐ら⁹⁾は, 中心市街地の性格を規定している特徴と住宅需要の関係を考察している。また, 孫ら¹⁰⁾は, 金沢市近郊の住宅団地居住者のうち, 将来都心居住を指向する居住者が望む住宅類型と周辺環境を検討している。地方都市中心市街地の人口回復に向けた実践的な論文, 報告が少ないのが気になるところである。

一方, 大都市の都心部においては, 水島ら¹¹⁾は, 東京都心部の既成市街地における居住回復について新規集合住宅の建設実態と居住者特性を分析し, 都心居住の進展を明らかにしている。魚谷ら¹²⁾は, 京都都心部において急速に町屋が壊され大規模集合住宅が建設されている実態を分析, 考察している。川崎¹³⁾は, 用途別容積型地区計画と街なみ誘導型地区計画の併用による住宅供給の誘導効果について考察し, 都心居住施策の諸効果を検証している。鶏内ら¹⁴⁾は, 都心回帰の動きに合わせて既成市街地で敷地細分化が進んでいる状況を取り上げ, 敷地規模規制からみた狭小敷地に対する建替え誘導手法を検討している。東村ら¹⁵⁾は, 福岡市都心部の歴史的地域である旧博多部において増加傾向にある共同住宅の建築実態を調査し, 誘導方策を検討している。いずれも大都市都心部での居住回帰に対する課題や誘導方策について論じている。

郊外住宅地に関する研究については, 1960年代前後に開発された大都市近郊のニュータウンに関するものが多い。これらは人口減少, 高齢化に伴う空き屋化, 住宅の更新等の問題を抱えた住宅団地としての問題意識が共通している。山本ら¹⁶⁾は, 千里ニュータウンの戸建住宅地の居住者の今後の定住意向を考察し, 高齢化や住宅の維持に関する課題について考察している。石橋ら¹⁷⁾は, 多摩田園都市開発の計画プロセスと実現された住環境の実態を調べ, 現在も高い評価を得ている既成計画住宅地の計画条件の抽出を行っている。三好ら¹⁸⁾は, 三田市の郊外ニュータウン居住者の地域活動への関心度や参加状況を明らかにし, コミュニティ形成過程を考察している。高見澤ら¹⁹⁾は, 町田市の建設後40年前後を経た公共集合住宅団地を経年化団地として対象とし, 居住者の現状と変化から建替え, 改善・補修等の将来的

住宅・土地 Housing, Land

鶴 心治 Shinji IKARUGA
山口大学

1. はじめに

住宅・土地問題に関しては毎年レビューされている。中でも土地分野の研究が少ないことは, 過去のレビューで指摘されている¹⁾。また, 近年のレビューを見る限りこの分野のテーマに大きな変化は見られない²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾。街なか居住と郊外住宅団地, 高齢者居住・住まい方, 住替え・居住履歴, 住環境・管理等が主流となっている。

以下に, 2005年から現在まで日本都市計画学会, 日本建築学会の論文集に掲載された都市計画的なアプローチを行っている論文についてレビューを行った。

2. 街なか居住と郊外住宅団地

中心市街地問題の抜本的な解決策が進まない中で, 2006